

2015年10月4日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記16章15～23節

説教：私は誰に仕えるべきでしょうか

あらすじ

ダビデの息子であるアブシャロムは、父に背きイスラエルの王になろうと企てます。人々は次々とダビデを裏切り、アブシャロムの側につきました。今日の箇所が登場するアヒトフェルもそうです。彼については23節にこう書かれています。「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。」アヒトフェルはかつてダビデの参謀でした。その彼がアブシャロムの側に寝返ります。優秀な頭脳が敵の手に握られてしまいました。イスラエルの重要機密も敵の手に渡ってしまいます。ダビデは大きな衝撃を受けます。

ダビデは、もはや神に祈るほかなにもできません。そんなとき、ダビデの友と言われていたフシャイが訪ねてきました。彼は最初、ダビデと行動をともにするつもりでいましたが、ダビデから、「あなたはアブシャロムところに行って彼に仕えなさい」と命令を受け、エルサレムに戻ることになりました。それが今日の箇所の背景となっています。

1 ダビデの友フシャイ

1) アブシャロムのしもべとなる

フシャイがエルサレムに戻った後、間もなくアブシャロムとアヒトフェルもエルサレムに入ってきました。フシャイはすぐにアブシャロムを迎えに出て、「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい」と言います。これを聞いた

アブシャロムはこう言います。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」

アブシャロムも、フシャイがダビデの友であることを知っています。当然彼は、父ダビデといっしょに逃げたものと考えていました。そのフシャイが、ダビデとは行動をともにせず、アブシャロムに仕えるのだと言うのを聞き、当然のことですが疑問をいただきます。

2) 高慢になっていくアブシャロム

もちろんフシャイも、疑われることは十分に予想していました。そこで彼はこう説明します。18, 19節「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々が選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。また、私は誰に仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

フシャイのことばは非常に巧みです。フシャイはアブシャロムに仕えると言い切っています。普通、それはダビデを裏切るということも意味することになります。ところがフシャイは、ダビデを裏切ったとはひとことも言っていない。その代わりこう言うのです。「主と、この民、イスラエルのすべての人々が選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。」「その方」とはいったい誰のことなのか。もちろんフシャイはダビデのことを指して語っています。けれどもア

ブシャロムはこのことばをそのようにはとりません。てつきり自分のことだと思い込みます。なぜ思い込むのか。アブシャロムが今どんな状態かを想像してください。ダビデが最も信頼していたアヒトフェルを味方につけました。ダビデは逃げ出し、自分はエルサレムに入城も果たしました。イスラエルの王座は目の前にぶらさがっています。すべてが思い通りに進んでいます。そんなときどうなりますか。すべてが自分を中心にまわる世界に見えます。高慢の絶頂です。ですからフシャイが「主が選んだ王」言うとき、それは自分のことなのだと考えるのです。

フシャイの語り方はずいといと文句をつけることはありません。アブシャロムは自分の罪によって、自らが掘った穴に落ちてしまったのです。このことが後になって大きな影響を与えていくことになります。

2 アヒトフェル

1) 彼が提案した作戦

アブシャロムは、ダビデを追いつめるために次の作戦を練るようにアヒトフェルに指示します。提案された作戦はここに書かれているとおりでです。白昼堂々と屋上にテントを張り、王宮に残してきたダビデのそばめたちのことろに入りなさい。なぜこんなことをするのでしょうか。敵をつぶすために武器を使わない。一滴の血も流さず、心理的なダメージを敵に与えていく作戦です。さすがにアヒトフェルです。ただ者ではありません。これによってアブシャロム軍の結束は強められ、父ダビデに対しては大きな打撃を与えることになります。

2) 預言者ナタンのことばが成就する (12

章 11 節)

いったい神は何をしているのでしょうか。ダビデはフシャイをエルサレムにわざわざ送り返し、なんとか形勢を有利な方向に導こうと考えました。ところがフシャイはアブシャロムの近くに潜入することは出来たものの、この計画を押しとどめることはできません。神はどうしてこのようなことを許していくのでしょうか。

理由があります。12 章 11, 12 節を開いてください。ダビデが、かつてバテ・シェバと姦淫の罪を犯したときにまでさかのぼります。自分の罪を隠していたダビデに、預言者ナタンがこう語って迫りました。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』」

神は何もしていないのではありません。アブシャロムがしていることは、すでに神によって告げられていたとおりでしたのです。私たちは、ここだけ読むと、父を殺そうとするアブシャロムはなんと恥知らずな息子であるかと憤るかもしれません。でも元をたどれば、今回の事件はダビデの罪から始まっているのです。バテ・シェバが人妻であることを知りながら、欲望を満たすために力づくで奪い、夫のウリヤを殺してしまう。その罪をひた隠しに隠して、人々の目の前では信仰深い王さまのふりをしていた。そんなダビデの罪がこのような結果を招いていたということを聖書は誤魔化さずに指摘します。

3 罪人の仕える神

1) 私は誰に仕えるべきか

でも疑問が残ります。ダビデは最初隠していたとは言え、最後には罪を告白したのです。もうそれ以上の責任を問う必要はないはず。ところがダビデの罪はアブシャロムに及んでいきます。イスラエルの人々の心はすさんでいきます。罪の告白をしても意味はないのでしょうか。

ダビデの友であったフシャイに目を留めていきます。フシャイはダビデから自分が犯した罪のことを聞かされていたでしょう。長男のアムノンが妹タマルを辱めたこと。アブシャロムがそのことでアムノンを殺した。そのことから父と息子の関係がぎくしゃくしてしまい、とうとうアブシャロムが父を憎むようになったこと。すべてを聞いていました。

フシャイがこれを聞いたとき、どう思ったのでしょうか。何とひどい人間だとさげすんだのか。いいえ。彼は言っています。「主と、この民、イスラエルのすべての人々が選んだ方に私はつき、その方といつしよにいたいのです。」ダビデがどんなにひどい罪を犯したとしても、なお仕えました。それはなぜか。主がダビデを選んだからです。主はどんな男を選んだか。罪を犯さない、聖い人間を選んだのか。いいえ。ひどい罪を犯したダビデを選びました。それでも主が選んだ王であるからフシャイは仕えるのだと言うのです。

2) あなたにも仕える

それだけではない。フシャイは同時にアブシャロムにも仕えるのだと言います。アブシャロムもひどい人間です。それでも仕えよ

うとする。なぜか。主に選ばれたダビデ、そのダビデの子であるから仕える。

そんな理由で仕えるのかと驚くでしょうか。でも、主とはそのような方なのです。主は私たちのところに来られたとき、人の姿となられ、私たちに仕えてくださいました。なぜ神である方が私たちに仕えようとするのでしょうか。私たちが何か良いことをしたからですか。もちろんちがいます。私たちは罪人です。自分の口で私は罪を犯したと告白するのなら、私たちはダビデの子孫となります。なぜなら、ダビデがナタンに責められたときこう告白したからです。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンは言いました。「主もまた、あなたの罪を見過ごして下さった。あなたは死なない。しかし、あなたはこのことによつて、主の敵に大いに悔りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

あなたに生まれる子。誰のことか。バテ・シェバが生んだ子どもがこのあと死にました。しかしそれで終わりません。アムノンが殺されました。やがてアブシャロムも死んでいきます。主は罪を犯したダビデを選び、主イエス・キリストはダビデのために仕えて死んでいきます。ダビデに仕えた主は、同じように私たちにも仕えてくださり、十字架で死んでくださいました。そのような恵みを見ることが出来ます。

フシャイは心からアブシャロムに仕えます。アブシャロムを救うために全力を尽くします。アブシャロムに仕えることがダビデに仕えることでもあると信じています。そして、ダビデに仕えることは主に仕えることでもあると信じていきます。いのちをかけてフシャイは仕えます。

フシャイを通して主のお姿を見ること

ができます。